

5年前の記憶

岡山市・岡山後楽館高2年 高松葵さん

「泥ついても思い出残して」という見出しで、五年前の出来事が蘇ってきた。二〇一八年七月六日、私が小学六年生の時に西日本豪雨は起こった。この豪雨により河川の氾濫、浸水害、土砂災害等が発生し、死者237名、行方不明者8名、重軽傷者は432名にのぼった。あれから五年経った今でも、この時期になると当時のことを思い出す。

「逃げるよ!」と言った一言で私達は近所の小学校へ避難した。母は東日本大震災を経験したことで災害への危機管理意識が高まり、もしもの場合に備えてかなり早い段階で行動に移したのだと思う。時間が経つにつれまた一人また一人と避難者が増え、いつしか避難所の体育館は人で溢れかえった。このときすでに水は大人の腰が浸かるほどだった。いつ帰れるのかという不安と慣れない避難所生活に心細くなりながら体育館で一晩過ごした。幸い、避難所での生活は長引くことなく七日の朝には家へ帰れることになった。しかし、すぐに元通りの生活には戻らなかった。私の家も被害を受け、通っていた小学校は泥水と雨風によって流されてきたものでとても授業が受けられる様子ではなかった。友人の一人は住んでいた家が全壊し、仮設住宅

での生活を余儀なくされた。水が引いてももなく、私の地域でも復興作業が始まった。地域の人を始めとし、県外や海外の人がボランティアとして地元の小学校を掃除してくれた。ニュースなどを通して豪雨の被害や現状を知った人々が募金や食料、日用品を寄付してくれ、地域の人にお弁当を配ってくれた。人はひとりでは生きていけない、本当にその通りだと思ふ。これほど破壊的な自然災害の脅威を目の当たりにしても、助けあって支え合って前を向ける人間を誇らしいと感じた。私は人とのつながりの大切さを肌で感じ、当たり前の生活が当たり前の幸せではないと実感した。

この新聞を読んで、西日本豪雨という同じ出来事を経験した江口佳名枝さんが自分だけでなく誰かの助けになりたいと行動を起こし今でも活動を続けてくれていることを知り、感銘を受けた。しかし五年経った今、人々の関心はだんだんと薄れてきてしまっているように思う。それでも私達の記憶にあるかぎり、西日本豪雨が起こった事実はなくならない。五年前、幼い私を救ってくれた人々のように、今度は私が誰かのために行動できる人でありたい。